令和５年度　課題研究報告①

岐阜県立岐阜希望が丘特別支援学校　　教諭　加曾利 晋也

研究主題	重度障がい児の可能性を広げよう ～視線入力の eスポーツで意欲を向上～
研究概要	【目的】 視線入力を使用した eスポーツを、特別支援学校の教育現場においても、意欲の向上、生涯できる活動、コミュニケーション手段、障がい理解の交流などを目的として利用できるようにする。 【結果 】 視線入力装置 tobii に加え、Flex Controller とキャプチャーボード、及び Nintendo Switch を接続することで、eスポーツができる環境を整えることができた。画面上に大きく表示された Aボタンを見て、カートを進めることができ、プレイすることができた。活動を楽しみに、待つ姿が見られた。 【考察 】 視線入力を活用するために必要な力については、身体面の状態や認知面の発達段階を考慮する必要がある。認知面では、画面上の対象物が分かり、見る、注視や追視する、探索する、色を塗るといった操作を段階的に目の動きで行う必要があった。課題となったのは、装置の配線やソフトの準備操作が必要な為にどうしても時間が掛かってしまったことである。児童生徒達が視線入力を活用して eスポーツを体験していると、周りの児童生徒や教師も一緒に見入って楽しんでいる様子が見られた。特別支援学校においても、意欲の向上、生涯できる活動、やりがい、コミュニケーションを広げるといったことにつながる活用ができる可能性を感じた。

助　言　者：岐阜県立長良特別支援学校　広井　隆司　校長

令和５年度　課題研究報告②

岐阜県立岐阜本巣特別支援学校　　教諭　　松尾 正

研究主題	IT ソリューションを活用した農福連携の推進
研究概要	【目的 】 特別支援学校において、作業学習の一環として農業体験がカリキュラムとして取り組まれている。 しかし、残念ながら多くの農福連携事業は、農業事業者が中心となった取組が多く、特別支援学校の子どもたちが農業を進める上で抱える問題の多くが解決されないままになっている。そこで当校の作業学習を通して IT ソリューション他、様々な分野に活動を広げ、特別支援学校の子ども達を中心とした、地域共生社会実現の一助となる『農福連携』推進に関する研究を行った。 【結果】 農業用アプリ『アグリハブ』は年間を通した子どもたちの作業記録に大きく貢献した。中日新聞,20230922,朝刊面,見出し「タブレットを手に畑へ　本巣特支生、スマート農業で蕎麦栽培取り組み」許諾番号：「20231011-29944」にて報道がなされた。 農福連携商品『～恋する蕎麦～ 初霜ルビー』の開発に成功し、子ども達の大きな自信につながった。朝日新聞,20230929,21 面,一般記事, 見出し「目指せＧＡＰ認証！珍しいルビー色のソバ」承諾番号：「23-2842」他、岐阜新聞,高校生ダイアリー冬号にて報道がなされた。 【考察 】 作業学習全般は実物を伴うものが多く、その活動は困難であるが、特別支援学校の子ども達を中心とした、地域共生社会実現の一助となる様々な研究活動を今後も継続したい。また可能であれば、本研究会にて情報を共有し、岐阜県から特別支援学校を中心とした農福連携を目指したい。

助　言　者：岐阜県立恵那特別支援学校　三島　祥江　校長

令和５年度　課題研究報告③

各務原市立各務原特別支援学校　　教諭　川合 健介

研究主題	「ＩＣＴ活用による個々の生徒に則した美術指導の研究～大きく映して「分かる」授業！～」
研究概要	【目的】 当校の生徒は、言葉による指示理解、自分で課題解決に向かうことができる生徒から、全体の指示に併せて個別にイラストや写真を用いながらゆっくり一つずつ確認する必要がある生徒まで実態は様々である。美術の授業では、生徒たちと美術教室での一斉授業を行っている。しかし、一斉授業を行う際に次の課題もある。 ・後ろの席に座っている生徒や、視力の悪い生徒に見えづらい。 ・教科書やプリントのどの部分を進めているのか視覚的に分かりづらい。 以上のことから課題を解決するために、今回の研究では、ＩＣＴの活用により生徒が主体的に参加し、充実感を味わえる美術指導のあり方を探る。 【結果】 ① 作品を提示する際に、作品の細部や別角度を重点的に画面に映すことで、平面資料では感じることができない立体感、素材感や量感を感じながら鑑賞をすることができた。 ② 作品鑑賞時に完成作品をタブレット端末で撮影し、画面に映し出した。生徒は自分の席で作品の細かなこだわりポイントや頑張った箇所について、自席で仲間に画面を見せながら説明することができた。 【考察】 生徒達はディスプレイに作品を映し出すことで、どこを注視すればよいか分かり、集中して教師の説明を聞き、作品鑑賞を行うことができたと感じた。また、普段気が散りがちな生徒がカメラ係を担った際に、対象を注視し意欲的に授業に参加する姿も見ることができた。今後も授業計画にＩＣＴの活用を位置付け、「分かる」ことにより生徒が主体的に参加し、充実感を味わえる美術指導のあり方を探っていきたい。

助　言　者：岐阜県立岐阜特別支援学校　中村　美雪　校長

令和５年度　課題研究報告④

岐阜県立可茂特別支援学校

教諭　春見 明子 、教諭　山口 敦士 、教諭　白井 大輝 、教諭　栗畑 理沙

研究主題	球状ロボット『sphero』を利用した、幅広い教育課程で取り組む授業展開について
研究概要	【目的】 sphero は、タブレットを用いて操作することができる教育用の球形ロボットであり、幅広い障がい種の児童生徒が在籍するなかで様々な授業を立案、実施することが可能である。学年や障がい種を超えた、学び合いの場が設定できる。 【結果】 実態が異なる４人の職員でチームを組み、sphero の使い方を研修し、それぞれがどんな授業ができるかを考え、話し合った。まずは職員が実際に操作したり、プログラミングを行ったりすることで、アイデアが生まれ、授業づくりにつながった。 授業実践後には、どのような活用が効果的であったかを話し合った。更に、そこで深めた考えを、全校に向けた自主研修会で、さらに大勢の職員に伝えることができた。 【考察】 障がい種は異なるが、同じ教材を使うことで、それぞれの学級の児童生徒や取組の様子についても交流することができた。今回の実践を通して、同じ教材を用いることは、お互いの考えを深めていく過程で非常に有効であると感じた。また、そうした数人の教員が中心になって、今回のように自主研修会を行い、さらに視野を広げていくことで、より多くの教員の ICT 活用のスキルアップや授業の向上が期待できると考える。

助　言　者：岐阜県立関特別支援学校　渡辺　政幸　校長

令和５年度　課題研究報告⑤

岐阜県立東濃特別支援学校　　教諭　片山 朋寛、　寄宿舎指導員　長谷川 賢

研究主題	イチゴの栽培から食への興味・関心やＳＤＧｓに対する意識を養う
研究概要	【目的】 ビニールハウスでのイチゴ栽培やコンポストでの堆肥作りなどを通して「食」への興味関心や環境に配慮する意識を高めるとともに、学校と連携しながら「働く」ことや SDGｓへの意欲・意識にも繋げる。 【結果】 ＜舎生の様子＞ ・朝食後、夕食後の残飯をコンポストに入れることを舎生で交代しながら行った。自分たちが出した残飯の量が分かり、大量に出た日には「もったいない」と言う舎生がいた。 ・コンポストを使用することで残飯から堆肥や液肥に変わる様子が匂いや形の変化から短期間で確認でき、驚く様子が見られた。 ・舎生が肥料を施した途端に葉が急に大きくなり、開花したことから、興味・関心が高まり毎日意欲的に世話をする姿が見られるようになった。 ・食のサイクルについての掲示物を活用して学習をすることで、今体験していることと繋げて考えることができ「私たちの残飯が野菜の栄養になるんだね」「イチゴ以外の野菜に混ぜても大きくなるのかな」などの意見が聞かれた。 ＜地域や学校との連携＞ ・当校と農福連携事業において関係のある介護老人福祉施設「ドリーム陶都」（土岐市）に職員が見学に行き、ビニールハウスでのイチゴの栽培方法について教えていただいた。また、株式会社「大地」（瑞浪市）では、食品が堆肥になる工程や堆肥を使った作物の栽培方法等について教えていただいた。これにより職員が堆肥の作り方や栽培方法についての知識を深め、舎生の指導に活かすことができた。 【考察】 ・コンポストでの堆肥作りからイチゴ栽培までの一連の活動を通して、食品ロスや残飯の再利用等に関心をもつことができた。しかし「残飯を少しでも減らしたい。でもイチゴのためにご飯を残したい」という意見も聞かれたため、食べ物の大切さについて重点を置いて今後も継続して学習していく必要性を感じた。 ・イチゴ栽培は、時間が必要なため意欲を継続することが難しい。観察記録を付けて確認し合ったり、発表する場を設けたりするなどして、見通しと意欲の継続を図りたい。 ・「美味しいイチゴを育てよう」と舎生みんなで力を合わせ役割に責任をもって継続して取り組むことができた。学校や家庭と連携をとり、この取組で培った力や学んだことを様々な場面で活かせるようにしたい。

助　言　者：岐阜県立岐阜聾学校　長瀬　さゆり　校長